第三回兵庫県地域創生戦略会議企画委員会議事概要

日時：令和元年 10 月 28 日（月）14:00～16:00
場所：兵庫県民会館　12 階　1202 号室

（委員）
・進行の仕方として、前半は戦略の基本目標と指標の在り方について話をする。後半は、ゾーンごとに話し合いを行いたい。ゾーンの分け方そのものがおかしいのではないか、など事務局案に対して意見があれば伺う。

（委員）
・資料 1-1 の数値目標について。婚姻率の維持を目標にしていることについて疑問を感じる。女性が活躍して生活力があれば結婚はしなくても子供が出来るのでは。ただ相手がいないといけないので、結婚というよりも出会いの方が良いのではないか。フランスでも、女性が結婚から自由になることで出生率が上がった例があった。出生率が、婚姻率や結婚を前提とした子ども子育て対策としていることに無理があるのではないか。

（委員）
・婚姻率が高いことが良いということを主張していくと、未婚の方たちの立ち位置がなくなるというか、反発もあると思う。子ども子育て、というところで、結婚で行くのか、それとも子供がある方の子育て環境を支援するとか、「子供を産みたい」と言っている方が子供を産めるようにするための支援をどうすべきか、など、そういった観点での指標の方が受入れやすいのではないか。

（委員）
・そもそも「子どもが増えてほしい」というのを一番の目標に持ってきてはどうか。ロジックモデルとしては「子どもが増えてほしい」という部分が一番上なのでは。政策として間違えるかもしれないし、違和感を感じる。

（委員）
・私も婚姻率、結婚に捕らわれないという考えが必要だと思うし、子供をつくりたくないという意見も重視すべきだと思う。
・どちらかというと「孤独を作らない」対策が重要なのではないか。結婚も出会いの場、友人をつくるのも出会いの場。ここ数年はやはり「孤独」が社会的な問題とされている。結婚だけが兵庫県にとどまる理由ではない。友人、家族の出会いを大事にすることが重要。

（委員）
・夫婦世帯の出生率は２を超えている。希望子供数は３だが実際は２。その１をどう上げるかが一つの施策。
・あと、根本的に結婚しないことが多いことがきっと行政側の課題認識だと思う。日本の場合は結婚してから子供を産む流れだが、この流れがおかしいとなると根本的な問題となってしまう。結婚してから産まれるというロジックモデルが日本はほとんど。「結婚している人は子供を産んでいる」という事実があって、「子供の数が減っている」ということは「結婚しない人が増えている」ということだから、「婚姻率を維持、もしくは向上させよう」という案が出てきている、という解釈をするべき。ただ、それが施策なのか、というのは別の議論ではないか。事実としての背景は認識すべきだ。

（委員）
・子育て対策としての結婚の話だが、子どもの対策としての結婚の話だと、ストレートに出生数がトピックになると思う。もう一つ、自身の意思での未婚者が増えることで、短期的に見れば子供が少なくなると思うが、中長期的に見て別の問題、例えば一つの可能性として例えば家族との繋がりが高齢化してから減ってくることで孤独死する人が増えるなど、新たな課題が発生したら、結婚とは違うかたちで何か対応がいるかもしれない。

（事務局）
・今までは結婚の話はしにくかったためあえて遠慮して、まわりの子育て支援ばかり充実させて来たが、それでは全然子どもは増えなかった。先生がおっしゃられたように結婚した人は２人以上産んでいるという事実に着目するしかないのか、と苦肉の策としてこういった表現に思い切って踏み込んだ。「未婚でも出産を増やすためにどういった目標があるか」など具体的なご提案があれば頂きたい。

（委員）
・出会いはすごく大切だが、定量的な指標を持とうとすると出会いの指標は無い。県側を支持するわけではないが、だからこそここで婚姻数が出てきたのではないか。「結婚を促進する」という施策は確かに私も違和感があるが、理解しなければならない面もある。

（委員）
・結婚されていない方に対しては、Ⅲ（２）の健康長寿対策、ここでカバーするのかなと。健康寿命の伸びとかではなくて、もう少し幅広い対策に、定量的な部分も含めて検討出来れば良い。貧困対策など、福祉のこと全体を含めて KPI の最上位となるような考え方だと思う。

（委員）
・「子ども子育て対策」のタイトルで婚姻率があることに違和感があるのでは。「子ども子育て対策」ではなく、「結婚対策」と書いたら。「対策」と「KPI」が整合

していないから、違和感がある。他の項目にもそういった箇所はある。

（委員）
・これについては一旦事務局で引き受けて頂きたい。婚姻率の話から話題を変えて、委員にご発言を引き続き順次お願いする。

（委員）
・五国未来づくり（資料 2）について。地域設定の中で、交流がキーワードになっているところも多いと思うが、見方やはかり方を考える必要があると感じた。例えば淡路のところで、「夜までまちが活気づいているか」というのは人によっては「うるさくて困る」という意見もある。ゾーンごとの指標をもう少し考えても良いのでは。丹波についても、交流ゾーンだと考えた時に、定量指標では農業産出額を見た方が良いのか、農林水産業を指標にして交流がいいのか、農業関連収入のようなかたちが良いのでは。
・住んでいる人が、住みやすいと思う観光にしないと、「観光客は喜ぶけれどそこには住みたくない」と言われると困ってしまうので、そういう部分で指標の持ち方には工夫がいる。

（委員）
・例えば、4 のファッションツーリズムゾーンについて。播州織も研究し現地の地場産業の方々と接する機会もあったが、この地域をファッションと一言でいうのは現実的に難しいのではないか。どのエリアでもそうだと思うが、取組を進めてきた中で残った課題があると思う。播州織について言えばテキスタイルなので、素材を作ることにはプロフェッショナルであり非常に質も専門性も高いが、商品化して販売するというところが弱く、現状の課題である。現地の方々も外からデザイナーを呼ばざるを得ない。一言で、ファッションや自然、ではなくて、それを本当に販売していく上で、もう少し噛みくだいた産業連関が必要では。誰が担い手なのかというところを整理して考えなくてはならない。

（委員）
・社会増対策について。地域創生戦略は 5 年計画で、例えば社会増対策の目標と取組の関係として感じたことだが、なかなか大学卒業時には、流出を止められない。歯止めをかける視点も重要だが、一方で 20 代後半や 30 代で戻ってくる仕掛けが出来ると、同じ世代の人がプラマイゼロになる可能性がある。定量的には難しいかもしれないが、意識が変わって帰ってくる人の指標もとらえてもらえたらいい。
・具体的には戻ってきたいとか、ここに住みたいとか、そういう意識を聞いても良いし、機会があればこちらで仕事をしたいとか少し先の将来のことについて聞くということがあっても良い。

（委員）
・五国の未来づくりは今から 5 年間に限る話では無い。上位計画と整合させた上で

5年、と区切った時に、行政や民間がそれぞれどこまでやるのか、というイメージまで落とし込めると実現性が増す。
・あと、社会増2025年ゼロという目標は、本当に出来るのか。前回の反省を踏まえて設定された数字なのか。

（事務局）
・6千人程の転出超過となっているが、我々の調査では、転出している大学生のうち6割くらいの方が兵庫県に就職しても良いと言っている。そんな中で、東京に就職後にミスマッチを起こしているのが5～6千人。難しい面ももちろんあるとは思うが、その方々の希望を叶えるような施策を打ち出すことで、ゼロにしたいと考えて設定している。

（委員）
・既出の、婚姻率、ゾーン、社会増対策の話以外に論点を持っている方がおられたら発言をお願いする。

（委員）
・KPIの枠組みの大きな話。例えば2Ｉの「地域の元気づくり」の部分で、定量的には県内総生産の21兆円を超えていくということで設定するが、本当に大事なのは、それぞれの目標の分解したところ。起業もするし、世代交代もするし、継承もするし、そのバランスをきちんと取りながら適切に総生産を上げていくことが重要。上位と中位にわけて論じるのではなくて、一緒にわかるような指標にすることが、より伝わりやすいと思う。
・また全体の話として、KPIは現在はっきりとわけて指標を立てていると思うが、専門用語で「A city is not a tree（都市は樹形図ではない）」という言葉があるが、「樹形図のように効率的に分けていっても良い都市ができるわけではない」という意味で、それぞれ、「この施策ができたから違うのが出来た」とか「子育て施策があったから地域が元気になった」「未来づくりが増えたから人口が増えた」など、関連性が一番の成功の指標だと思う。そういう意味では全体の書き方も、わけて整理していくという書き方ではなくて、「それぞれの関連性を形象する」という大きな話をしても良いかなと思った。

（委員）
・戦略と KPI の関連が見えづらいところが多い。Ｉ２地域の未来づくりで「時代潮流を見据えた地域の未来づくり」とあって、KPIがこのように出てくると、再検討が必要なところがある。
・もう一つは地域創生戦略に関して、国が SDGs を見据えなさいと言っているにもかかわらず、それが見えない。先ほどのご指摘のように SDGs の考え方は一つの課題を色んな観点を持って色んなネットワークで解決すること。そういう話を含めて、今までとは違う地域創生戦略の目標を立てなければならない時代が来ているのではないか。切り口を変える必要性は無いか。

（委員）
・大きく変わったと思う。一つは、「人口減少しても」と言っている点。一人あたりの指標を持って来ている。もう一つは、一律ではない「ゾーニング」。ゾーンで考えていて、うまくメリハリをつけた施策が展開出来ると、非常に面白い。
・朝来市や多可町など入っていないところは若干気になるが、重なっているところがあることはいいと思う。

（委員）
・基本理念の部分だが、外に公表するのか。「人口減少しても」というコピーは言う必要があるのか。この意味が含まれたような別のキャッチコピーがあればいいのでは。意味合いを入れることは非常に価値があると思うが、わざわざ頭から「人口減少」と入れなくても良いのではないか。ネガティブなワードより、「読んだらその意味がわかる」コピーにするべきでは。
・地域のポイントポイントで一番売りになる部分を拾っているが、「その次にこういうところもあるよね」と繋げていくと連携の在り方が見えるのでは。例えば食であれば但馬について、但馬牛だけではなくて、但馬牛×日本酒で売り出す、など。そうすれば地域間の連携がはかれるかな、と。
・また、大切なのはプロセス。県民がその気になることが重要。その過程を経てこのプロジェクトもブラッシュアップされる。ボトムアップで、原案としては非常に素晴らしいと思うので、集まってもらって意見を述べてもらい「いいね」とその気になってもらえると良い。プロセスの部分でいかに県民の声を拾い上げて巻き込んでいくか。

（委員）
・指標の在り方の話、指標と戦略の関連性、SDGs の視点の話、そして「人口減少しても」というワードを入れる必要があるか、主旨を含んだ別の表現にしては、という話、ゾーンの重なりや連携の指摘もあった。さらにプロセスの重要性についても話があった。
・自分自身も、行政区を越えたらこんな可能性があるのかと正直驚いている。ただ、部会でも話題にあがったが、決まったゾーンだけにとどまらない、また他のゾーンと連携させていくことが必要ではないか。
・続いて資料２のゾーン１～７について。各地域の強みや指標のはかり方について、各チームに分かれて話し合いをして発表してもらう。（５と６は関連性があるため１チームで話し合いを行う。）

（委員）
・２の「航空宇宙産業創出ゾーン（東播磨～西播磨の臨海部～上郡～佐用）」について。これを見て２のゾーンに住みたいかと言われたら嫌だ。もちろん産業の創出する拠点があるし、素晴らしい強みはあるが。せっかく瀬戸内のエリアは住みやすいゾーンであることにもかかわらず、いわゆる昔ながらの重厚長大になってしまっている。
・せっかくなので「最先端の産業の集積 VS（with）のどかさ」というか、そうい

うところを上手く活用して、このエリアが「職住近接」がしっかりと出来るエリアだということをもう少し表現できるのではないか。
・また、せっかくこういう企業があって、取組みの方向性の中で小、中、高、大の接続という話もあったので、仮に「理系人材育成ゾーン」として、企業が産官学連携で教育を担っていくとか、「ここに来たらこんな素晴らしい人材を世界に輩出できる」と言えるようなゾーンにしたいと思う。

（委員）
・３「一日生活圏を維持する兵庫楽居生（ライフ）ゾーン（西播磨～但馬）」について。弱みを強みにしようというテーマで意見を交換した。人口減少が著しいモデル地域として、先進的な取組（省人コンビニの設置など）を行った後、外部から視察、交流拠点として来てもらう。住民がコンサルタントになるくらい、やってみたらどうかと。省人コンビニは地域の人の交流拠点ともなる。地域の中だけではなく、外からも人が来て、特産品を買ってもらったり、外国人の方にも来て頂きたい。若者や外国人が来やすくするために、昔ながらの景観も残しながら、清潔で綺麗ということも重要なので、例えば見晴らしの良いトイレなどを設置できれば、という意見もあった。
・あとはバイクや自転車の経路として自然を楽しみながら来てもらう、など。
・他に、兵庫県のココロンカードの五国版を作成し、自分の居住地域の他にもう一個地域が選択出来て、そこに行くと公共サービスが安く受けられたら良い、という案があった。小学生等に配って割引などを行う。二地域居住の小学生版のようなイメージ。
・また、過疎地は教育が交通を含めて不便なので、ICT の取組を進める、など。

（委員）
・４ファッションツーリズムゾーン（北播磨～姫路～たつの）について、中身を見ているとファッションに限っておらず多岐に渡っているため「クラフトデザイン」という言い方が良いのではないか。
・それぞれ地場で素材がきちんと産出されていて、また素材を扱うところで雇用を行っていて、働きながらデザインを修行することや、そういったかたちで新プロダクト（製品）を生み出す人材養成をしながら、産業を活性化しながら、新しいプロダクトを生み出すということができるのではないか。少しファッションから広げた方がいい、という考え方を提案する。
・もう一点は、ゾーンの拡大ということで、木材産業があるところや皮革産業、ゴルフのアイアンを作っているところなど、飛び地になっても、様々な地域を含めて拡大して行くのも良いかもしれない。そうすると空白地帯がなくなっていく、と。
・あと、抜けているのは森林大学と林業のところが、産業としては抜けているので、追記してはどうか。課題としては、創出するシステムとして、素材産業からデザインまでかかわるような人材をきちんと地域から輩出して、そういった方が兵庫県に着地してデザインにかかわることが必要かなと。
・また、プロダクトツーリズム、産地があって、デザインがあって、楽しむ場があ

るということなので、テレワークを楽しむことや、アイアンを作ってそのままゴルフ場で初打ちが試せる、など、色んなことをアイデアとして提案する。

（委員）
・５但馬ブランドを世界に直接つなげる新たな働き方実践ゾーン（但馬地域）と、６二地域居住・都市農村交流ゾーン（丹波～阪神北部～神戸北部）について。似ているところはあるが、一番大きな違いは５と６の間では都市との距離感が違う。６は都市と近いのでそのあたりの強みを活かす、また５は電車でついたあとの移動が非常に大変なので、そのあたりの改善は非常に重要だ。
・6 は都市と近いし、農産品ブランドもある。NIPPONIA 篠山城下町ホテルも古い建物を改修してうまくいっている。神戸の北区等も古い建物が多いが、この地域はそれらを活かして観光利用できるところが上手く進んでいる。都市と共存しながら、都市で疲れた人が農村で癒やされる、そして農村にお金が落ちる仕組みにする。農家一軒が単体で行うと厳しいと思うが、集落単位で、例えば協同組合形式で行えば良い。農業を活かしたツーリズムと、都市との共存を活かすことが重要だ。
・５はジオパーク、但馬牛や技術大学校など、価値のある資源がここにはあって、また非常に豊かな自然があることも活かすことを考えると、ハイソな人をターゲットにした地域のつくり方もあるのではないか。ニセコではないが、一泊何十万のホテルがあるとか、もしくは、自然の中だけれども最先端で、環境にも優しいサテライトオフィスが点在している。世界とつながっていて最先端だけれども、エコロジー感がある。国定公園ではないが、特別な地区として、自然破壊をせず、最先端の開発を行う。「どう自然と共存するか」ということにチャレンジしてやっていく地区になると面白い。

（委員）
・７「大阪湾ベイエリア大交流ゾーン」について、まず「阪神・淡路ベイエリア大交流ゾーン」に名前を変えたい。イメージ的にはヨーロッパの大航海時代を見据えて、エリア内で鉄道や車ではなくて海上輸送を増やしていく。まさに SDGs だと思う。
・具体的には IR とか万博が開かれる夢洲が神戸空港から海上アクセスで 15 分くらいで非常に近いため、そういった部分を活かして交流を促進する。例えば USJ のオフィシャルホテルを神戸に作る、とか、海上アクセスの中で、船の移動もアトラクション化している、そういうことも考えたらよいのではないか。
・要は強みはあるものの、点と点が線で結んでいないということ。どう結んでいくか。ベイエリアの就航数や、ホテルも非常に足りない。大阪の方でもホテルは足りないということなので、神戸の方で作るとか、あとは周遊プランもきちんと考えられていないため、考えていかなくてはならない。
・あとは医療都市のメディカルツーリズムを考えて行く必要がある。
・神戸空港も国際化を目指すべきだ、という話があった。
・また三宮の都市再生が、非常に重要。

（委員）

・１令和の「御食国」再興“食文化都市”ゾーンについて。淡路島を中心に議論をしたが、課題として「その地域を盛り上げたい人」をどうつくるか。産業もそうだし、「盛り上げたい」という人材育成を意識する必要がある。地域に一体感を持たせるということは、淡路島一つを取っても、北と真ん中と南で温度差が大きかったりする。全体を盛り上げよう、という視点になっていないのではないか。

・１のコンセプトは、この地域には淡路、神戸、東播磨が入っていて、潜在力があるため、淡路島の特色として、リゾート感をもっと出す、もっと増やすというのははっきり言うとその地域のカラーが出る。もちろん地元の方がそれを位置づける必要がある、ということは前提とした上だ。そうすれば「再び来たい」という人の割合が増えリピーターであり、支援するホスピタリティのリフレッシュの定性指標となりうるんだろう、ということです。

・さらに良いサイクルになっていくと、淡路島では食に関する高校とか、食に関する専門職大学の動きがあるため、地域の人材が回していけるという意味で、定量指標として、食に関する地元再就職率というものが、一つの目的になるだろうと。

・実際にはコンテンツとしての体験ツーリズムとか、具体的な議論を深めなければならない。

（委員）

・政策的には正式に色々たくさんしなければならないと思うが、今出た案を全てやっていけばいいものができると思う。夢があると思う。

・今日の議論を踏まえて、現地に行くことも考えている。

（事務局）

・ありがとうございました。今日の議論を経て、やはり実際の現場の雰囲気や、現地で活躍している人の意見を聞きながらでないと、なかなか議論が前に進まないかなと思った。11 月に現地を見ることを検討している。日程調整などご協力頂きたい。